

創世記とミルトン「楽園喪失」にみる

アダムとイヴ像

斉 藤 恵 子

第二部 ミルトン『楽園喪失』におけるアダムとイヴ像

一、創世記とミルトンをつなぐもの

前号の第一部で、旧約聖書の創世記における二つの創造物語を取りあげた。二つの物語とも、人間の創造について語っているとはいえ、二つは別々の異った資料に基いており、それら資料は、時代もそれを支えている思想も異なっている。そのため、二つの創造物語を読み解いてみると、相互に矛盾するところが見出される。これは、聖書が神の靈感によって書かれた、一字一句誤りのない書物ではなく、私達が自分の責任において読み、それを解釈、判断し、そこから必要なメッセージをくみとることができるものであることを証している。

しかし、二つの創造物語の喰い違いにばかり目をとめるのではなく、その違いをもっと意義あるものと考えらるなら、二つの物語をたがいに補足しあうものととらえることもできる。第一の創造物語では、人間男女がどのように創造されたかというより、すべての生き物の最後に、人間がどういう役割をになって創られたかというところに力点がおかれている。

第二の創造物語と、禁じられた果実を人間が食べるに至った経緯には、人間の責任、選択、自由の放棄が示されている。人間が死すべき存在となり、女は出産の苦しみを負い、男による女の支配があり、人間は労働の労苦をになう。人間のおかれた現状が神との関係で説明されており、このような帰結にいたった原因を説明する、原因譚とよばれる文学類型として読むと、合点がいく。女性の創造が第二創造物語ほどはっきりと描かれているのは、古代オリエントの世界では画期的であることをこそ評価すべきであろう。

男女が同時に創られたとする第一の創造物語より、男の肋骨の一本から女が創造されたという第二の物語のほうが、素朴だがずっといきいきと語られている。単純に見えるが、多くの寓意に富んでもいる。そのため、第一の物語が忘れられてしまうほどに、肋骨から生まれたレディ、イヴが人類の記憶に深くとどめられてきた。

加えるに、イヴがアダムより劣った存在で、男は女に従属するべきであるという解釈は、正統的なユダヤ教とそれを受け継ぐキリスト教の中で、その主たる担い手であった男性の教会の聖職者や神学者たちに快く受け入れられてきた。

しかし、男女は神の前に平等であり、同等なものとして創造されたこと、神によって禁じられた果実に手をのばし、食べてしまった責任は、男女が共に負うべきものであったことは、

前号で詳述したとおりである。

17世紀のイギリスの詩人ジョン・ミルトンの代表作である叙事詩『楽園喪失』の主題は、人間の墮罪と、楽園追放である。旧約聖書の二つの創造物語にもとづいているが、二つの物語が、創世記の第一章から第三章24節までにおさめられている短いものであるのに対し、『楽園喪失』では、全12巻10565行に及ぶ長大な叙事詩となっている⁽¹⁾。

ミルトンの父は、清教徒的傾向の強い、詩人肌の教養人であり、ミルトンを英国国教会の聖職者にするつもりであった。ミルトン自身も、詩作を始めた頃は、国教会正統派であったが、教会史を研究していくうちに、高位聖職者の墮落頹廢をつぶさに知って、ついには聖職者になる希望を捨て去り、いかなる礼拝にも出席しなくなった。

時代はちょうど、王政から清教徒革命、そして王政復古へといたる激動の時であった。ミルトンはイギリスが唯一回、共和制をとった時期にあたり、オリヴァー・クロムウェルの過激な改革と国王処刑の正当性を主張して、王政復古後には、逮捕、投獄された。辛うじて処刑は免れたが、晩年には、教派には属さず、人間理性に基く自由意志の尊重を根底におくという信仰のあり方をとった。

過労のため失明し、『楽園喪失』は、口述筆記を頼んで完成した。旧約聖書の物語を素材にしなが、それに託してミルトン自身の、革命への幻滅と新しいイギリスへの期待、新しい楽園への希求をこめて書きあげた叙事詩であった。神による救いの可能性、神の恩寵への渴望が、この作品をかくも長大なものとさせた一因であろう。

創世記において、アダムとイヴの誘惑者は蛇であった。蛇は、「主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢い」(創世記第三章1節)ものとして登場する。女に先に声をかけ、神が禁じている善悪の知識の木を食べるようにそそのかせる蛇の手腕は、短かい中に実に巧妙なものとして書かれている。女はまんまとその術にはまってしまったのだが、ここでの蛇は、あくまで単なる蛇である。

ところが、ミルトンの蛇は、墮天使、悪魔(セイタン)の化身である。セイタンのまたの名は、ルシファー。もともとは、神に愛された天使、「明けの明星」といわれるものである。ところが神に反逆したために、地獄に堕ちて苦悩している。セイタンは、神に対する復讐の念にもえ、新たにつくられた楽園とそこに住んでいる人間、すなわちアダムとイヴをみて、はげしい嫉妬にかられ、彼等を誘惑し、神に反逆させようとする。そこでセイタンは蛇の姿をとり、まずイヴを誘惑する。セイタンのたくらみ通りに二人は禁じられた木の実を食べ、その罪のために楽園から追放される。ミルトンの『楽園喪失』では、主役がセイタンかと思われるほどに、セイタンとその配下の軍勢、「万魔殿」なる彼等の住みか、セイタン達と天使達との戦いの有様が詳細に描かれる。その描写は精彩にあふれ、分量も多い。

アダムとイヴの罪は、「人間の墮落」「原罪」とされた。しかし創世記には、「原罪」という言葉も、「墮落」とか、人間のおかした「あやまち」という表現も一切ない。「原罪」という概念がキリスト教神学にあらわれたのは、5世紀から6世紀にかけてで、聖アウグスチヌ

スが重要な役割を果たした。

悪魔の化身としての蛇という考えも、創世記にはない。ミルトンがあれほどの筆量で描写したセイタンも、その配下の軍勢も、創世記には一切姿をあらわさない。

悪魔、セイタンは、悪霊、ルシファー、反キリストともよばれ、11世紀頃から教会の教えの中に姿をあらわしてきたらしい。人間は善きものとして創造された筈なのに、絶えず人間界にはびこる悪を説明するために、悪魔というものが考えられたのであろうか。悪魔はやがて滑稽な姿、あるいはグロテスクな恰好で描かれ、民間伝承に登場するようになり、パロディや笑いの対象ともなってくる。

創世記とミルトンとをつなぐものとして、中世の『アダム劇』の「アダムとエヴァ」⁽²⁾と、中世イギリスのコーパス・クリスティ劇とよばれるサイクル劇の中で、アダムとイヴ、そして悪魔がどのように描かれているかをみてみると、ミルトンの墮天使や、男女像を時の流れにそって理解することができる。

二、中世の『アダム劇』の「アダムとエヴァ」

12世紀のヨーロッパには、教会用語であるラテン語以外に、その土地の言葉で書かれた聖書劇が存在しており、その草稿も残っている。ベルリン生まれのユダヤ人の批評家エーリッヒ・アウエルバッハ⁽³⁾は、切れ味の鋭い文体分析を用いて、ヨーロッパ文学における現実描写の流れを追求した『ミメシス』の著者である。その第七章で「アダムとエヴァ」をとりあげている。これはロマンス語（アングロ・ノルマン語）の草稿で伝わっている最古の作品であるという。

中世の宗教劇では、アダムとイヴのテーマが、キリスト受難劇のプロローグとしてひんばんに利用されている。アダムのあやまちを第二のアダムであるキリストがあががない、イヴのあやまちを第二のイヴであるマリアがとりなすという図式である。

この『アダム劇』の「アダムとエヴァ」でも、誘惑者は、悪魔の形をとっている。悪魔と蛇とは同体である。悪魔は、最初は、アダムに近付いて、木の実を食べるようにすすめるが、アダムは創造主たる神の命令に忠実で、その堅固な意志をまげさせることはできないことを悟る。そこで悪魔は、エヴァに近付き、エヴァを攻略して、エヴァに木の実を食べさせ（『アダム劇』では「林檎」になっている）、木の実を食べたエヴァがアダムを巧みに誘惑して、遂にアダムも食べてしまうように作戦を変える。

アウエルバッハは、エヴァを「悪魔の特別な手引きがないかぎり、彼女は好奇心さかなな罪深い存在であるとはいえ、夫の意のままに動かされ、夫よりはるかに劣った、か弱い存在でしかない。そもそも神は男の肋骨から彼女を創造したのである。神はアダムに向って、彼女を導くように命じ、エヴァに向っては、彼に仕え服従せよと命じた。エヴァは彼に対して小心、従順、内気である。」⁽⁴⁾と描写している。「明晰で理性的な男性の意志に太刀打ちできない」彼女は、蛇によって「神の整えた秩序をくつがえし、妻を夫の主たらしめて、両者を

破滅に導いて行く。』⁽⁵⁾

神に教えられて、何をなし、何をつつしむべきかをよく心得ているアダムが、惑乱し、遂に誘惑に屈するのは、エヴァが林檎を手にとって、「おあがりなさい、アダム」(Manjue, Adam!) と繰り返して誘うからである。

「おあがりなさい、アダム、ためらわないで」「おあがりなさい、怖れないで。」先に試食したエヴァの執拗なすすめが、アダムを陥落させる。神への堅い服従への誓いが、妻の煽りで、いとも簡単に崩れ去ってしまう。

エヴァ 何て臆病なためらいようでしょう。

アダム ではいい、取ることにしよう。

エヴァ おあがりなさい、お取りなさい。

そうすればあなたは善と悪がおわかりになりますよ。

はじめに私がいただきますよ。

アダム そして私がお前の後に。

エヴァは林檎を一口食べて、アダムに甘美だから味わうようにすすめる。

アダム 一体どんな味なのだ。

エヴァ かつて人間が味わったこともないような味です。

今では私の眼はおそろしくよく見えて、自分が全能の神のように思えてくる。

.....

おあがりなさい、アダム、ためらわないで。

今こそ時はみちたのです。

.....

あおがりなさい、怖れないで。

遠い昔の物語ながら、今日の身近な夫婦間にも起こりそうなことだ。キリスト教の救済劇として、崇高な意義をもつはずの、「世界史上はじめての男女の対話」をアウエルバッハは、「アダムが話し、振舞うのを聴く者は、自家のあるいは隣家の誰かが話し、振舞っていると感じてしまう。幾分かは弁も立つ男であるが、見栄っばりの妻が詐欺師の約束にそそのかされていて、彼女によって不運な愚行に導かれるといった場合、どこの町家でも、どこの農家でも、寸分たがわぬ事態が展開される」⁽⁶⁾ ことが予想されると分析している。

中世のキリスト教演劇では、わかりやすく簡素な文体で、教養のない素朴な人々へ、聖書のさまざまな場面を語りかけ、それを通して宗教的真理に目ざめさせることを目指していた。この『アダム劇』はそれに成功しているといえよう。

三、イングランドのコーパス・クリスティ サイクル劇のアダムとイヴ

サイクル劇、あるいは聖体劇（「コーパス・クリスティ」とはキリストの体、つまり聖体をあらわすラテン語である）とは、中世後半に、イングランドで行われた宗教劇である。この世の歴史の一巡りを描くことからサイクル劇とよばれる。中世ヨーロッパでは、聖書に題材をとった宗教劇が盛んに行われたが、イングランドでは、天地創造から、キリストの受難、復活、昇天から最後の審判に至るキリスト劇の全歴史を演ずるという、壮大な聖史劇となった。

この聖史劇が、聖体の日に上演されるようになった。パンとぶどう酒が、聖餐式の典礼で、キリストの聖体に変化するという教義に基いて、1264年に教皇ウルバヌス四世によって祝日として認可され、イングランドでは、1318年以降全国的に祝われたという記録が残っている。三位一体の祝日後の木曜日が聖体の祝日と定められた。木曜日ではなく、次の日曜日に祝うところもある。

イングランドの都市では、聖体という神からの贈り物を祝って、町をあげて宗教劇を上演した。宗教的な祭儀であると同時に、民衆の祝祭日でもあった。民衆の素朴だが、したたかな生命力に支えられて、200年もの間、絶えることなく上演され、シェイクスピアを頂点とするエリザベス朝演劇を準備する土壌ともなったものであった。

ヘンリー八世による宗教改革があり、イギリスはカトリック教をはなれて、イギリス国教会をつくった。そういう宗教上の理由でサイクル劇は、人為的に衰退させられたものだが、禁止されなかったら、まだまだ何百年も生命を保ち続けたかも知れない。教会から遊離することなく、かつ民衆の旺盛な好奇心とエネルギーとに支えられてもいたからである。

12世紀のアダム劇が、簡素にして低俗な表現の中にも、本来の宗教的な意義を堅持しているのに較べると、コーパス・クリスティ劇は、ずっと喜劇的で、笑いの要素を多く含み、卑猥、猥雑な表現も見られる。聖堂の内部で演じられるのではなく、上演の中心は、ギルド（同業者組合）に属する職人達であった。それぞれの都市では、それぞれの市当局が中心になってサイクル劇上演の運営にあたっていた。かなりの数の人物が、台本執筆や管理にあたっていたようである。天地創造の発端から最後の審判まで、およそ40ほどの場面を、旗手や音楽隊を伴って、パジャント・ワゴンとよばれる^{だし}山車で、街を練り歩く。民衆は、街角に立って、次々に現われる山車で演じられる各場面を観るのである。それにあわせて市も立^{いち}ったから、街はお祭の雰囲気に満ちていた。

サイクル劇における旧約聖書劇は、必ず、墮天使ルシファーの叛逆と失墜から始まっている。ミルトンの『楽園喪失』で、まず、神の命令で天国から追放されて、地獄におちたセイタンのことが語られるのは、この伝統にそっている。それに加えて、ミルトンの場合は、セイタンに対する強い思い入れがあったものと思われる。創世記では一言も語られないルシファーの物語は、4世紀末には、すでに教会教理の一部となっていたようだ。

コーパス・クリスティ劇の台本が完全な形で残っているのは、ヨーク、チェスター、ウェ

イクフィールド、リンカン（あるいはノーフォーク）で上演されていたものだけであるが、チェスター二番という、呉服商組合の演じていた「天地創造とアダムとエバ」は、台本が完全な形で残っているのだから、その中での二人の描かれ方をみてみよう。二つの創造物語がともに語られるのだが、まず創世記の第一創造物語と同じように、6日間にわたる万物の創造が語られる。⁽⁷⁾

六日目

天と地とが完全に造られたるいま、
われは、わが姿に似たる人を造り、
魚、鳥、獣、大小を問わず、
人に治めさせんとす。
いまやなんじらをわが^{イメージ}像に似せて造る。
男と女とを存在させん。
なんじら、産めよ、ふえよ、
地に満てよ。⁽⁸⁾

「男と女とを存在させん。」と宣言されていて、男女二人が創造された筈なのだが、その後の成り行きをみると、神の目には、アダムしか存在しないようだ。六日目のト書きには、「ソレカラ、神ハアダムノ創造ニ移ル。アダムヲ造ッテイル動作ヲスル」とあり、イヴのことは神の念頭にはない。アダムに霊を吹きこむことによって生命あるものとした後に、アダムを楽園に連れて来て、例の禁令を言い渡す。

アダムだけにその禁令が言い渡されることが旧約聖書よりはっきりする。

なんじは、この楽園のすべての木より
意のままに食らうことを得。
されど、悲しみとよろこびを知るこの木からは
その実を絶対に食らうべからず。

それを食らう日には、
必ずや、死に見舞われん。
しかるがゆえに、この木より離るるべし。
思いあがるべからず。⁽⁹⁾

その後に、創世記の第二創造物語にならって、一人でいるアダムに、「ふさわしきたすけ

人を造らん」と、その肋骨を一本とって女を創造する。この創造物語の描き方も、矛盾した話を二つ並べているのだが、創世記よりも、もっと大らかな庶民の感覚で、細部の厳密さには無頓着、矛盾は矛盾のまま受けとめ、あれもこれもあってよしとする。

アダムとエバが裸で楽園に立ったのを見て「悪魔ガ蛇ノ姿ヲシテ楽園ヘ近ヅク」とある。悪魔はよこしまな考えを抱いたばかりに天国から放り出された不幸を嘆き、自分達にかわって楽園の主となった人間への嫉妬と敵意を告白する。

〔悪魔〕…クソッ、いまましい！あんなに大きな
至福を失くしちゃったなんて。何という不幸だ！
よこしまな考えを一度抱いたばかりに
天国から放り出されちゃった。⁽¹⁰⁾

罪を犯させて、必ずや楽園から追い出させようと心の中で誓う。墮落させるためには神に反逆させるのが一番効果的であることを、自分の経験に照らしてよくわかっているのである。そしてまず最初に女に狙いを定めようとする。

土くれから造られたあんな悪党が
あんな至福を得ていいものだろうか。おれの流儀じゃ否だ。
やつの女房に遊びを一つ教えてやろう。
しばらくのあいだ、
女をだますことに専念する。大丈夫うまくゆくだろう。
それから女を使って二人を楽園からひきずり出す。
女はおれの言うとおりにするだろうから
だませることは間違いない。

女というものは屁理屈をつけては
禁じられていることをやりたがる。
だから、あの女はあの木に近づき
木の実がどんな味だか食ってみるだろう。
…

女を誘惑して
楽園のあの木の実を喰わせるんだ。
女は弱い、うまいものには目がないから
絶対いやとは言わんだろう。⁽¹¹⁾

果たして、蛇の皮をまとして変装した悪魔は、誘惑に見事に成功する。エバは林檎を食べて、その美味に酔いしれて『アダム劇』のエバと同じくアダムにすすめる。きめては、神のようになれるのですよというすすめである。

アダム、あなた、わたしの大事な愛^{いと}しい人、
この林檎を召し上げれ。
美味しいですよ、あなた。
よもや否とは言いませんわね。⁽¹²⁾

神が登場して、第二創造物語と同様に、背きの罪に対して罰を言いわたす。女に対する戒めの後半部は、

なんじは苦痛と悲しみと大いなる嘆きをもって、
子を産まん。
今日なしたることによりて、
なんじの夫はなんじを常に治め、
なんじを永久にその力のうちにおき、
なんじを苦しめん。⁽¹³⁾

となっており、創世記の

お前のはらみの苦しみを大きなものにする。
お前は、苦しんで子を生む。
お前は男を求め
彼はお前を支配する。 (創世記第三章16節)

と比較すると、「なんじの夫はなんじを常に治め、なんじを永久にその力のうちにおき、なんじを苦しめん。」(下線筆者)「常に」「永久に」「苦しめん」という表現にこめられた、男の女に対する優越感、女を永久に支配下においておきたいという男の支配欲が伝わってくる。神からの裁きを受けてアダムは嘆く。

ああ！　いまや、おれたちは不幸のドン底だ！
ああ！　恥ずかしいことに、破滅してしまった！
神さまに背いたために、
幸福を失ってしまった。

〔観客に〕

さて、男のみなさん、わたしを手本にして、

女の誘惑はしりぞけなさいよ。

とにかく、女を信用すると、

男は間違いなくだまされますから。

…

妻と悪魔とは姉と弟のように、

二人いっしょにここから出て行って当然だ。

…

神さま、男が妻と悪魔のどちらも信用しないよう、

おまもりください。⁽¹⁴⁾

女からさきにだまそうとする先程の悪魔の独白といい、このアダムの嘆きといい、これをきいた男の観客は、自身をアダムに投影して、大いに共感し、笑いのうちに同感と賛意を表明したことであろう。

サイクル劇は祝祭劇であり、祭は常に民衆のエネルギーの発散の場であった。笑いのうちに日頃の鬱憤を晴らし、本音をぶちまけ、一種のカタルシスを得る。また、こういう形であらわれた人間観察の鋭さにも驚かされる。

サイクル劇の台本は、聖書の知識が豊かな聖職者によって書かれたものらしいが、それが上演の母胎である職人達のギルドの親方に渡されると、様々な改変や味付けもされたことであろう。民衆の日常生活と、他方では聖書の外にも外典などの宗教文学から栄養分を吸収することによって、リフレッシュされていったものと思われる。中世の『アダム劇』同様、聖書を読めない民衆に、演劇を通じて宗教の秘義を悟らせる目的は保持しつつも、サイクル劇では祝祭のもつ娯楽的要素がより鮮明にあらわれている。

聖書に基く教会の教えを大枠では守りながら、聖なるものを格下げして、笑いや、低俗な言葉使いの中に、民衆の本音や、うさ晴らしを組み入れていく、その仕組みに、中世の宗教劇が何百年も続いた秘密がかくされている。

四、ミルトン『楽園喪失』のアダムとイヴ

ミルトンの『楽園喪失』では、全十二巻という長詩の第四巻でアダムとイヴは姿をあらわす。泉から湧き出た小川が樹陰をうねうねと流れ、色とりどりの花が咲き乱れる楽園の中の二人は、清らかで、幸福そうだ。特にその前の三巻で、⁽¹⁵⁾ 墮天使セイタンの宮殿での、地獄の首領たちの会議や、神と人とに対して、セイタンが企て実行しようとする陰謀を、長々と読んだ後では、エデンの園のさわやかな自然と、そこに語らう二人の姿に、読者はほんと

した感じを抱く。また、ここでは労働はまだ辛いものでなく、たのしみとなっている。

アダムはイヴに、楽園の木々の中で、善悪を知る樹の実だけは決して食べてはいけないという神からの禁令を、それを直接きいていないイヴに伝え、教え諭し、イヴがその導きに従うという形をとっている。イヴはそれを全く当然のこととして受けとめ、

おお、アダムよ、私はあなたの肉の肉として、あなたのため、
そしてあなたから造られたのです。あなたなくしては
私の生きる意味はないのです。私の導き手であり頭^{かしら}である
アダムよ！

私を造り、支配するアダムよ、私はあなたに命じられたとおり
おとなしく従うつもりです。神がそう定め給うたからです。
神はあなたの律法^{おきて}であり、あなたは私の律法なのです。
これ以上のことをあえて知ろうとはしないことこそ、女の最高に
恵まれた知識^{ほまれ}であり、女の誓^{ちか}いと思います。(第四巻 635-639行)⁽¹⁵⁾

とアダムには答えている。「ここであなたがたに知っておいてほしいのは、すべての男の頭はキリスト、女の頭は男、そしてキリストの頭は神であるということです。」(コリント前書11章3節)を想起させる答えであり、第Ⅰ部で引用した、テモテへの書簡中の「アダムがさきに造られ、それからエバが造られた」「アダムは惑わされなかったが、女は惑わされて、あやまちを犯した」の男女観とも軌を一にするものである。

セイタンの眼にも、この二人は、性別の違いだけでなく、アダムが絶対的な支配権をもっているように映った。

…ところで、その性が一見して
等しくないのと同じく、二人は等しい存在ではなかった。
彼は瞑想と勇気に向くように、彼女は柔和と魅惑的な優美に
向くように、また、彼はただ神を仰ぐように、彼女は彼の内なる
神を仰ぐようにと、造られていた。彼の美しい広い額と
仰いで天を見る眼は、絶対的な支配権を示していた。(第四巻 295-300行)

セイタンは、神への復讐を、人間を誘惑し、堕落させるという一事に賭けたが、誘惑の的をイヴに絞ったのは、理性においてアダムがすぐれていることを見抜いたからである。セイタンは、夢の中で、イヴの清い精気を汚し、想像力を惑乱させて、傲慢さを助長させようと、蝦蟇に化けて、禁令の木の実を食べるように言葉巧みに誘う。

イヴが自分の導き手であるアダムに、奇怪な夢の話をした時（第五巻 28-93行）アダムは、次のように説いて聞かせる。神に似て創られた人間の最高の能力、人間の魂の中で最も高次の能力は理性である。理性の統御の下に、想像力、空想その他の低次の感覚があるが、心身が休息している眠りや夢の中では理性が働かなくなり、危険な状況に陥りやすい。しかし自分が嫌な夢だと憎んで、絶対にそれを認めない限り、心に汚点や禍根は残らないと言って安心させる。（第五巻 95-128行）

実は、アダムも、楽園の樹木の美味しそうな果実をもぎとって食べそうになる夢を見たことがあった。伴侶たるイヴが未だ創造されていなかった時である。その夢には、セイタンはあらわれず、目覚めた時には、神の姿があった（第八巻 304-316行）。その時、アダムは、神から禁制を言い渡され、食べれば死すべき存在になるとの警告を受けたのである。

アダムの夢は、アダムが理性ある存在として神から信頼されていることを証し、イヴの夢は、イヴが理性において劣り、アダムが彼女の導き手でなければならないことを示唆している。

創世記における二つの創造物語を、ミルトンはどのように扱っているだろうか。第七巻で、天使ラファエルは、アダムの要請にこたえて、セイタンとその配下たちが天から追放されたあとに、整然とした秩序をもち、「自然の階梯」と呼ばれる被造物の一条乱れぬ位階^{ヒエラルキー}、六日間にわたる神の天地創造の業を物語る。聖なる理性を与えられ、直立して他のものを支配し、神と交わるにふさわしい高邁な心をもち、神の像^{かたち}のように、アダムを造ったと。

神はお前を自らの像^{かたち}の如く、そうだ、まさしく神の
真の像の如く、創造^{つく}り給うたのだ。

…神は、お前を男として
造られたが、子孫を設けさせるために、お前の
配偶者を女として造られた。（第七巻 526-529行）

これは、創世記の第一創造物語より、女性の役割を、「子孫を設けさせるため」と、はっきりと、しかも狭く規定している。

その次の巻（第八巻）で、アダムは、イヴが創造された時のことを天使ラファエルに物語る。創世記と大きく異なるのは、未だ伴侶がなく、孤独だったアダムみずからが、まわりにいる獣、魚、鳥のいずれもが、自分と同等ではなく、地位の低い生物であるので、「自分に似た者」を与えてほしいと神に頼むところである。神は、「喜ぶがよい、今度連れてくる者は、お前によく似た者であり、お前に適^{かな}った助^{たすけ}者であり、お前のもう一つの自分であり、お前の心の欲望^{のぞみ}にかなったまさに願いどおりの者なのだ」（第八巻 448-451行）と宣言して、アダムの胸部から、一本の肋骨^{あばら}を取ってイヴを創造する。

ラファエルは、アダムから、イヴ創造の話をきき、アダムに、彼女の美しい、外面の魅力に隷属してはならない、肉の悦楽^{よろこび}に溺れてもならない、愛を理性という基盤の上にすえて、豊かな判断力により、罪に陥れようとするすべての誘惑を斥けるようにとの訓戒を与える。(第八巻 561-593行)

ラファエルは、常に、アダムを人類の祖として話し、理性においてすぐれたアダムを頭としてイヴが従うのは当然であるとみている。セイタンが、アダムを先に誘惑するのは無理だと判断して、蛇になりすまして、まずイヴに狙いをつけるのであろうことをもこの天使は予見している。

アダムも、イヴの誘惑に対する弱さを知り、不安を抱いている。イヴが一人でいる時に狙われたら危ないと思っているので、イヴがある日、園の草木の世話を、二人別々にやろうではないかと申し出た時、「お前は自分に生命を与え常に忠実に庇い守ってくれる者の脇から離れてははならないのだ。危険や何か不名誉なことが近くに潜んで

いる時、妻は、自分を守り最悪な場合は共に耐えてくれる夫の傍を離れないのが、安全で賢明な道なのだ」(第九巻 260-269行)と言いきかせる。

その配慮にイヴは強く執拗に抗議して、自分を信じてほしいと言い張る。

…外から助けられないで単独では試みにも

会えない、そんな信義や美德はいったい何なのでしょうか？

一人の場合でも二人の場合でも、自分で自分が守りきれない

ような不完全なものに、私たちの幸福を賢い創造主^{つくりぬし}が作られたとは、

考えたくありません。

(第九巻 336-339行)

これほど理路整然と主張するイヴは、頼もしくさえみえる。アダムは、不安をぬぐいきれずに、神は人間に自由意志を与えられた。しかし、理性が働いていれば自由だが、時にその理性が罠に陥ることもあり得るからと警告する。

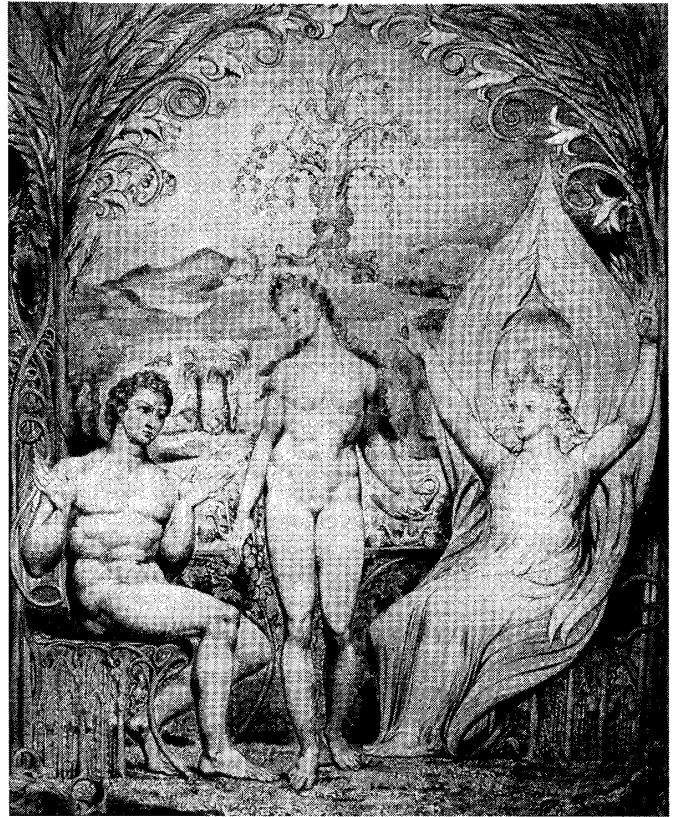


図1 ブレイク「アダムとエヴァに警告する大天使ラファエル」
(『失樂園』より) 1808年頃 ポストン美術館蔵

「人類の祖^{おや}アダムはそう言ったが、イーヴは承服しなかった。」(第九巻 376行)

ミルトンのアダムへの信頼は一貫している。だから、イヴが誘惑者セイタンの巧みな説得に屈した時、「お前と共に死ぬ決意を固めた以上、わたしも亡びてゆかざるをえない」「わたしはお前と運命を共にし、同じ審判を受ける覚悟だ」(第九巻 953行)と、アダムはあくまで雄々しい。神からの^{さばき}審判の座に立った時、「本来わたしが保護すべきであったにもかかわらず、つい危険な目に逢わせてしまったお前の女性としての弱さと脆さを釈明して、どうかこれを許しすべての罰と怒りをわたしの^{こうべ}頭に加えていただきたい、と大声でお願いするつもりだ。」(第九巻 955-958行)あくまで、自分が責任を引き受けるつもりであると言明する。非の打ちどころがないようにみえるが、アダムもこの心境に達するすぐ前に、裁きを受けて「女」なる存在に、烈しい憤懣と、それをもたらした神への怨みを吐露している。

…「蛇よ！ わたしの前から立ち去るがいい！ お前は蛇だ、蛇と呼ばれるのにふさわしい女だ！ お前は^{あれ}彼と共謀した、しかも^{あれ}彼に劣らぬくらい陰険で憎むべき人間だ。違うのは、お前にはあのような蛇特有の姿も色合いもなく、従って心のなかの^{わるだくみ}奸計が表にあらわれないという点だけだ。地獄の虚偽を蔽い隠した、神々しすぎるほど美しい姿に、^{だま}騙されないためには、今後はあらゆる生きものがお前から逃げ出すのが本当だと思う。お前さえいなかったら、わたしは普通幸福であったはずだ。およそ安全どころの話ではなかった時に、お前が誇りと独りで出歩こうという空しい虚栄心にかられて警告を無視し、なぜ信用しないのだといって怒るようなことがなかったならば、どんなによかったかと思わざるをえない。それどころか、相手が悪魔自身だっていい、とにかく会いたい、会ったら出し抜いてやると、お前は^{うぬぼ}自惚れていた。ところがあの蛇に出逢うや否や見事に翻弄され、騙されてしまった。騙されるといえば、お前が蛇に騙されたように、わたしもお前に騙されてしまった。それも、わたしがお前を賢明で堅実で円熟した女、どんな誘惑にも克てる女だとばかり思いこみ、自分の傍から離しても構わぬと信じこんだのが、いけなかったのだ。一切が充実した美德どころか、単なる見せかけにすぎず、お前という人間も要するにわたしの体からとられた、生まれつきひねくれた一本の^{あばらぼね}肋骨、それもどうやら^{ひだり}不気味に曲った肋骨にすぎないことを、わたしが知らなかったのが間違いのもとだった。肋骨の正しい数からはみ出した余分な

ものとして、棄てておけばよかったのだ！ 創造主なる神は賢明にも
天国を男性の天使達で充たされたのに、なぜ最後になってこの
新奇な生きもの、この自然の美しい汚点、をこの地上で造られ
たのか？ なぜ女性を除いた、天使のような男性だけでこの世界を
一挙に充たすか、人類の繁殖のための何か他の方法を見つけ
ようとされなかったのでしょうか？ もしそういうことが可能で
あったとしたら、こんどの禍は生じなかったろう、いや
今後も生じないはずだ。女のかける罠^{わな}のために生じ、女という
性をもった者とののっぴきならぬ関係から生ずる無数の
紛争^{もめごと}も、起こらないはずだ。 (第十巻 867-898行)

「生まれつきひねくれた」「それも不気味に曲った肋骨」⁽¹⁷⁾ から生まれた女。「肋骨の正しい数からはみ出した余分なものとして、棄てておけばよかった」という嘆きと呪いは、古代ギリシヤの昔から、新約聖書の書簡の書き手と中世宗教劇のアダムにも、ミルトンのアダムにも共通するものである。ミルトン独りだけの性差別意識、女性蔑視の思想というより、数千年におよぶユダヤ教、キリスト教の男性優位の歴史からうまれたものとみるほうが正しいのであろう。

あれだけ、アダムを自分の導き手と尊敬し、あなたに従うことのみを望んでいると言っていたイヴが、禁断の木の実を食べて、「目が開けた時」に、その木にむかってこう語りかける。

…それとも、そんなことはやめて、せっかくのこの知識を誰にも
教えないで、自分の武器として独り占めにしておこうか？
そうすれば、女として自分に欠けているものを補い、いっそう
彼の愛情を惹きつけることができる。今以上に彼と同等な人間に
自分を高めることができる。そして恐らく、——これこそ望ましい
ことだが——いつの日にか彼の上に立つ人間になれるかもしれない。
隷属している者に自由はない。 (第九巻 819-824行)

「隷属している者に自由はない。」イヴのこの言葉は、注目すべきだ。ミルトン自身が、イヴにこの言葉を言わせたかったのではないか。イヴは、自分が理性において劣っていること、理性にまさるアダムには従属しなくてはならないことをよく自覚していた。だから彼と同じような理性をもてば、彼と同等な存在、自由に自分の意志に従って行動できることを知っていて、その自由を手放したくないと思ったのであろう。

アダムとイヴとの従属関係は、ミルトンだけが考えたものではない。何千年の伝統の上に

たった人間観、男女観につらなっている。一对の夫婦として、アダムとイヴをみれば、イヴが自分ゆえにひき起こした墮罪の重さを実感した時、アダムの怒りを受けとめ謙虚に自分の

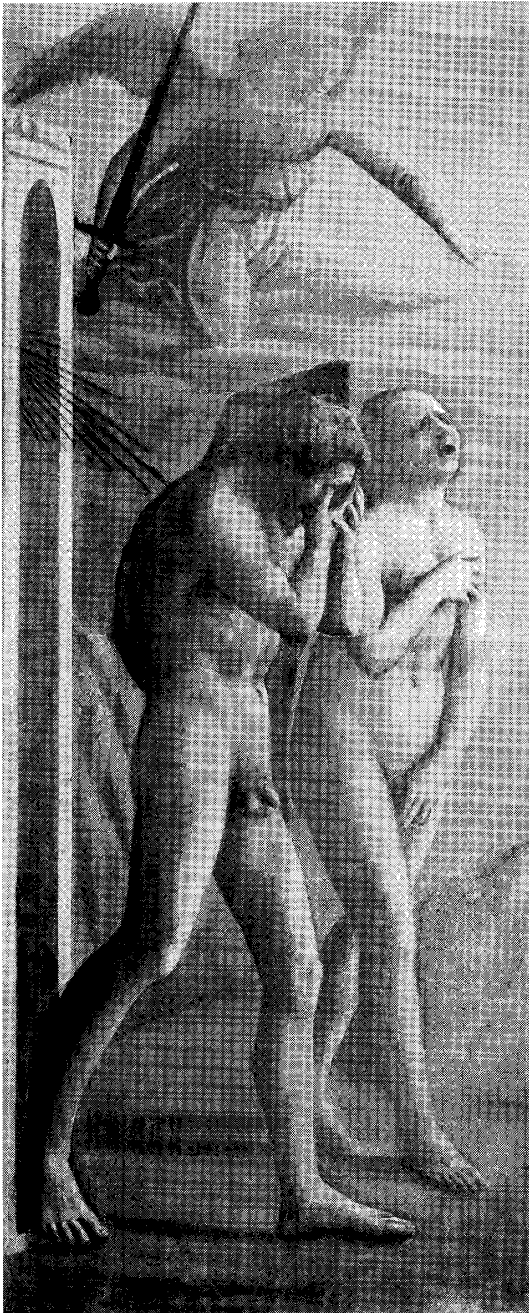


図2 マザッチョ「楽園追放」1424／25～27

あやまちを認め、アダムに心からの赦しを乞い求めている。そしてアダムもそれを受け入れ、たがいに、神からの罰を負う覚悟を固めて、「二人は手に手をとって、漂泊^{さすらい}の足どりも緩やかに、エデンを通して二人だけの寂しい路を辿っていった。」(十二巻 648-649行)のである。

ミルトンは、しばしば家父長制の擁護者、男尊女卑、女性蔑視の権化であるかのように非難されてきた。彼の女性観、結婚観に対して、強い批判や反発が表明されている。その受容と反発の歴史は、その時代々々の状況や人々の意識を反映してきている。しかしミルトンの女性観、男女観は、ミルトン一人の思想だけでなく、長年にわたる教会神学とそれを受容してきた人々の意識の反映でもある。近年、ミルトンの結婚観や男女観の見直しが提唱されているのも、ミルトンをもっと、公平に再評価したいという希望のあらわれであろう。⁽¹⁸⁾

創世記の二つの創造物語と、ミルトンの『楽園喪失』とを読み直し、比較検討してみると、両者は、それほど本質的に相容れないほどにはへだたっていないのではないか。男女共生を人々が強く意識する時代になって、このような読み直しは試みる価値がある。聖書もミルトンも、共に現代の視点から読み直しを求めている。

註

- (1) 叙事詩は、そもそも、さまざまな時代、場所、民族にみられる長編の物語詩であるから、長いのは当然である。ホメロスの『イリアス』と『オデュッセイア』をはじめ、口承文学の上になって書き記されたものも、ウェルギリウスの『アエネイス』、ダンテの『神曲』、そしてミルトンの『楽園喪失』のように一人の詩人によって書かれたものもあるが、総じて長編であり、ミルトンのものが群をぬいて長いということでもない。
- (2) 本論文で、筆者は最初の女性を「イヴ」と表記するが、他の作品からの引用の場合は、そこでの訳語に従って「エヴァ」あるいは「エバ」という表記に従うこととお断りしておく。
- (3) エーリッヒ・アウエルバッハ（1892-1957）ベルリンに生まれ、ハイデルベルグで法律を修める。のちにグラフスヴァルト大学ロマンス語学科に在籍。第二次大戦中はユダヤ人であるため、トルコへ移住し、そこで「ミメーシス」の大半を書きあげる。
- 第二次大戦後はアメリカに渡り、イエール大学、ハーヴァード大学で教鞭をとった。
- (4) アウエルバッハ『ミメーシス』上 篠田一士・川村二郎訳 ちくま学芸文庫 2000 261-262頁。
- (5) 『ミメーシス』上 262頁。
- (6) 『ミメーシス』上 272頁。
- (7) 石井美樹子訳『イギリス中世劇集』—コーパス・クリスティ祝祭劇 篠崎書林 1983 21-50頁。
- 本論文におけるイングランドのコーパス・クリスティ祝祭劇の引用は、すべてこの書物からのものを使わせていただいた。
- (8) 『イギリス中世劇集』 5-17頁。
- (9) 同上 44頁。
- (10) 同上 43頁。
- (11) 同上 43-44頁。
- (12) 同上 45頁。
- (13) 同上 47頁。
- (14) 同上 48頁。
- (15) ミルトンの『楽園喪失』では、事柄を、時の経過にそって叙述するのではなく、はじめの三章を、セイトンの成立、その神に対する反逆と人間に対する復讐にあてている。これは、叙事詩の書き方の一つで、物語の中心部へ読者をひき入れることで、作者の情念のあり方を理解させている。
- ミルトンは、アダムを通して、人類の救いを願っているが、ミルトンの情念は、神への反逆者セイトンに深くコミットしているのではないか。自由のために戦って敗れ、今は王党派の圧迫を受けている自分とセイトンを重ね合わせていたように思われる。
- (16) ミルトン『失樂園』上 平井正穂訳 岩波文庫。
- 本書における『楽園喪失』からの引用は、平井正穂訳を使わせていただいた。
- (17) 「不気味に曲がった肋骨」の原語はsinister。
- Rather than solid virtue, all but a rib
Crooked by nature, best, as now appears,
More to the part sinister from me drawn,
Well if thrown out, as supernumerary.
To my just number found. (下線は筆者)
- (18) 辻裕子 佐野弘子編『神・男・そして女』

ミルトンの『失樂園』を読む 英宝社 1997。この書には、七人の論文が集められている。多角的にミルトンの女性観、結婚観、夫婦観が考察されているが、長年支配的であった、女性蔑視、それも家父長的男性優位にたった思想の持主であると考えられてきたミルトンを読み直して、現代の視点で再評価しようとする試みとして、どの論文も一貫している。

参考文献

- エーリッヒ・アウエルバッハ 篠田一士・川村二郎訳『ミメーシス』上・下 ちくま学芸文庫 2000
石井美樹子訳『イギリス中世劇集』—コーパス・クリスティ祝祭劇— 篠崎書林 1983
石井美樹子『中世劇の世界』よみがえるイギリス民衆文化 中公新書 1984
グリン・ウィックム 山本浩訳『中世演劇の社会史』 筑摩書房 1990
奥田宏子『中世英国の聖書劇』神と人へのスペクタクル 研究社 1984
御輿員三『神と悪との間で』—『樂園喪失』論— 京都・あほろん社 1970
辻裕子・佐野弘子編『神・男・そして女』ミルトンの『失樂園』を読む 英宝社 1997
平井正穂『ミルトン』 研究社 1958
ジョン・ミルトン 平井正穂訳『失樂園』上・下 岩波文庫 1985
Grant McCollly *Paradise Lost*, Russell & Russell, 1963
John Milton *Paradise Lost*, ed. by Alastair Fowler, Longman, 1971
John Milton *Paradise Lost*, ed. by Scott Elledge, W. W. Norton, 1975